

平成31年度病害虫発生予察情報 注意報第1号

平成31年2月6日
岩手県病害虫防除所

育苗期に細菌病が多発する恐れがあります！

播種から育苗期間中の温度管理に細心の注意を払いましょう！

1. 対象作物、病害虫：イネ、細菌病類（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病）
2. 対象地域：県下全域
3. 発生時期：育苗期
4. 発生量：多
5. 予報の根拠

- (1) 平成30年は、籾の感受性が高いとされる出穂期前後の気温が平年より高く推移し、強い降雨もあったため、細菌病の感染に好適な気象条件であったと推察される（図1）。
- (2) 籾における細菌病類の検出状況は、過去に注意報を発表した平成24年産並に検出率が高い（表1）。

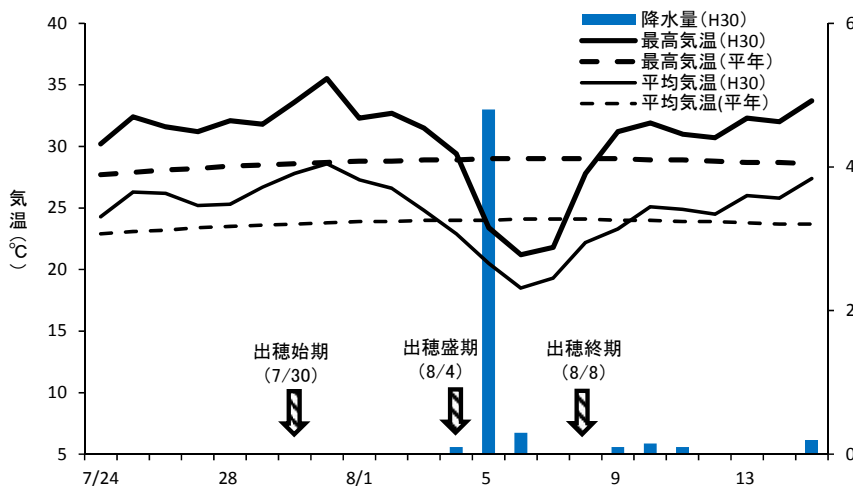


図1 平成30年出穂期間中の気象経過（盛岡）
※出穂は北上川上流（普及センター調べ）

表1 細菌病類の検出状況調査結果（H24～30）

年産	検出率 (%)	調査点数 (点)
H 24	6.3	160
H 25	2.8	105
H 26	0.9	104
H 27	1.9	103
H 28	0.0	93
H 29	2.1	95
H 30	8.2	98

※H24は注意報（平成25年2月12日付け）を発表



写真 細菌病の症状

葉鞘が水浸状に褐変し、葉鞘の途中から次葉が抽出したり、ねじれて出るなどの出葉異常が認められる。葉齢が2葉期以降に進んだ苗では、新葉の葉鞘や葉身の基部が白色から黄白色に脱色し、その後だいたい褐変枯死する。葉を手で引くと容易に抜け、その基部は褐変、腐敗している。

6. 防除対策

(1) 耕種的防除

- ・育苗期間中（特に催芽・出芽時、緑化～硬化初期）の高温は発生を助長するので、適正な温度管理に努める。
- ・プール育苗は、細菌病類の発生を抑制するのに効果的である。
- ・その他、育苗期の留意点は以下のとおり。

<育苗期の留意点>

項目		対策
塩水選		○充実した種子を確保するため、可能なものは実施。ただし、消毒済み種子の場合は、薬剤流出の危険があるため、実施しない。
予措	浸種	○12～15℃とし、10℃以下にならないようにする。消毒済み種子の場合は、水換えは種子に付着した薬剤が落ちないように注意して静かに行う。
	催芽	○30℃を厳守する。過度の加温や長時間の催芽は発病を助長するので絶対に行わない。 ○健全種子への感染拡大を防ぐため、水を強制的に循環させる装置（循環式ハト胸催芽器等）を用いる場合は、催芽器内に入れた桶内で催芽する等、種子のまわりの水を直接循環させないよう工夫する。
播種		○厚播きは発病を助長するため、基準の範囲内で可能な限り薄播きとする。
出芽		○出芽器の庫内温度は30℃を超えない。過度の加温は発病を助長するので、絶対に行わない。
育苗	ハウス温度	○育苗ハウス及びトンネルの開閉をこまめに行い、育苗温度は25℃を超えない。
	かん水	○過かん水は発病を助長するので絶対しない。
プール育苗		○プール育苗の場合、入水を硬化初期から行う。 ○緑化終了後2～3日以内に湛水（ヒタヒタではなく、十分な水深を確保）にしないと抑制効果が期待できないので注意する。

(2) 薬剤防除

岩手県農作物病害虫・雑草防除指針に掲載している有効な薬剤で種子消毒を行うこと。

なお、イソチアニル粒剤（箱施用剤）の播種前又は播種時（覆土前）処理を、種子消毒と併せて実施すると防除効果が高まる。

7. 留意事項

(1) 平成23・24年は細菌病類の発生が多かったが、注意報（平成25年2月12日付け）の発表を受けて各地で温度管理の徹底など対策が行われたため、平成25年は発生が少なくなった（図2）。

(2) 育苗期における管理の留意点については、今後発行される技術情報も併せて参照すること。

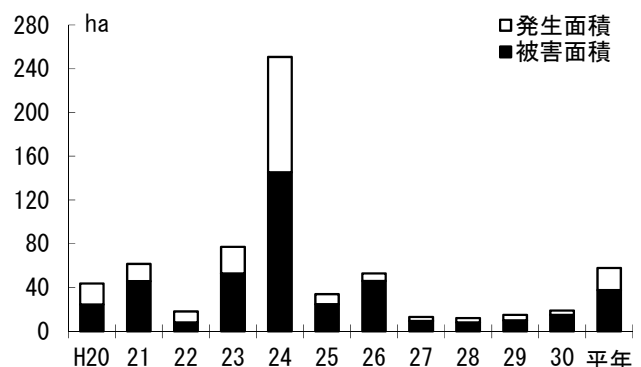


図2 細菌性腐敗症の発生面積の推移
(市町村防除実績報告)

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】

岩手県病害虫防除所 TEL:0197-68-4427 FAX:0197-68-4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス: <http://i-agri.net/Index>